

	学部長	学 長
閱 覧		

国 外 派 遣 研 究 員 報 告 書

令和 6年 5月 31日

國學院大學学長 殿

所属・職名 文学部教授

氏 名 藤澤 紫



令和 5 年度 国内派遣研究員として実施しました研究について、下記のとおり報告いたします。

記

1 派遣期間 (期間延長のある場合は含めて下さい)

令和 5年 10月 1日 から 令和 5年 12月 31日 まで

実際の出国日 ①令和 5年 8月 12日 同帰国日 令和 5年 8月 27日

実際の出国日 ②令和 5年 10月 14日 同帰国日 令和 5年 12月 28日

2 受入先研究機関など

ルーヴェン・カトリック大学 (Katholieke Universiteit Leuven : ベルギー) 文学部日本学科の客員研究員 (Visiting Scholar) として、個人研究室 (文学部棟 736) 及び図書館を拠点に活動を行い、同大学所有の世界遺産の修道院ベギンホフ 76 号室を宿舎として借用した。合計 90 日の滞在中に欧州 6 か国の諸機関を訪れ、史資料の実見調査等を行った。

3 研究目的

浮世絵の調査、研究を進め、浮世絵が海外で受容された理由を画題、様式、技法から分析し、東西文化交流史の観点からその機能を明らかにすることを目的とする。申請者が研究対象とする浮世絵は、美術作品の中でも特に海外に優れたコレクションがあることでも知られる。これ迄も欧米圏での調査を重ねてはいたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、近年は海外での調査、研究者間の直接の交流の機会を逸していた。欧州でも名高い日本学研究を行うルーヴェン・カトリック大学を拠点に、「浮世絵と東西文化交流史」に関わる現地調査を行い、その成果を現地の研究者と共有し、知のネットワークを構築することを目指す。

4 派遣中の研究概要

①の期間は、ルーヴェン・カトリック大学のヤン・シュミット准教授の依頼で、EAJJS Workshop for Doctoral Students 2023 カンファレンスの senior supervisor の役を受けた。滞在中は大学所有のアイリッシュ・カレッジに宿泊し、各国の約 20 名の大学院生の指導に携わる機会も得た。日本学を様々な観点から学ぶ欧米圏、アジア圏の優れた若手研究者との交流を通じて得たものは、新たな知見のみならず、本学の大学院生と交流を持つ契機ともなり、その関係性は帰国後も続いている。②の期間はルーヴェン大学の個人研究室（文学部棟 736）や図書館を拠点に、以下に示す国をまたいだ調査活動を行い、国公立の諸機関、建造物、史跡などを調査した。また、ベルギー、イタリア、オランダの 3 国では、国公立の機関で史資料の実見調査等を行うこともあった。中でも、世界屈指の浮世絵コレクション（約 7500 点）を所蔵するベルギー王立美術歴史博物館（ブリュッセル）にて、複数回にわたりバックヤードにて作品調査を行ったことは貴重な体験であった。私の研究テーマである鈴木春信に関しては、所蔵の錦絵、版本など、所蔵作品の全てを一挙に拝見する機会を賜った。紙の質、保存状況や出版時期による色彩の微細な違いなど新たな発見があった。加えて、欧州における浮世絵コレクションの特色やその形成過程に関わる史資料の収集を、計 6 か国の美術館、博物館、資料館などの諸機関で行うことができた。ルーヴェン大学に Postdoctoral Researcher として在籍する浮世絵研究者、フレイヤ・テリン氏の協力者を得たことは大きかった。また美術のみならず植物園、動物園などの特色ある展示施設を訪れ、その歴史と展示方法を学んだことも大きな成果であった。その詳細は、以下のとおりである。

1. ベルギーにおける調査研究事項

・ブリュッセル：ベルギー王立美術館、ブリュッセル市立美術館、楽器博物館、マグリット美術館、王立美術館（古典美術館・世紀末美術館）、漫画博物館、ハノン・ハウス、オルタ美術館ほか

・ルーヴェン：ルーヴェン大学図書館、M・Museum Leuven、Botanical Garden、旧ルーヴェン旧市庁舎ほか

・アントワープ：プランタン＝モレトウス博物館、アントワープ王立美術館、アントワープ動物園ほか

・ルーヴェン＝ラ＝ヌーヴ：UC Louvain（フランス語圏ルーヴァン大学）図書館

2. オランダにおける調査研究事項

・アムステルダム：アムステルダム国立博物館、ファン・ゴッホ美術館

・ライデン：ライデン国立民俗学博物館、シーボルトハウス

③ドイツにおける調査研究事項

・ケルン東洋美術館ほか

④ルクセンブルクにおける調査研究事項

・ルクセンブルク国立歴史美術博物館、ルクセンブルク市立歴史博物館 ほか

⑤イタリアにおける調査研究事項

・トリノ：MAO 東洋美術館ほか

・ジェノヴァ：キヨッソーネ東洋美術館ほか

・ミラノ：プラダ財団美術館、ドゥオモ博物館ほか

⑥フランスにおける調査研究事項

・パリ：ギメ東洋美術館ほか

また、上記の諸機関の学芸員のほか、滞在中に欧州にて研究を進める複数の研究者との再会もなかった。特に、**Marianne Simon-Oikawa** 氏（フランス・パリシテ大学教授）、及川茂氏（日本女子大学名誉教授）、**Ewa Machotka** 氏（スウェーデン・ストックホルム大学准教授）らとは共同研究の相談を進め、新たな研究費獲得に向けて動いている。

先にルーヴェン大学に滞在された、史学科の山崎雅稔准教授、手塚雄太准教授には、渡欧に際して細やかなご配慮を賜った。滞在中に2度にわたる「ルーヴェンカトリック大学・國學院大學 国際交流プログラム」を実施し、大学院生の交流が深まったのも、両先生方の尽力のおかげである。その成果を軸に研究を進めるべく、両先生には、令和6年度の特定課題研究「浮世絵が輸出工芸品に与えた影響—在外コレクションの図像検討を中心に—」の共同研究者として、ご一緒に研究を進める機会を頂いている。

来る6月15日には国際浮世絵学会の春季大会を本学にて開催する予定であり、私も司会者として登壇する。本学には、大正6（1917）年から浮世絵研究の先駆者である藤懸静也教授が着任された歴史もあり、今後も国内の浮世絵研究の拠点となり、東西文化交流の一翼を担う発信が叶うよう、教育、研究、普及活動に励む所存である。また今回の研究期間に得た知見や人脈を、今後の学務にも有効に反映していきたいと思っている。

5 その他の活動

①講演会「East-West cultural exchange in Ukiyo-e: a story of images and media from the reception of 'Dutch studies' to the influence on Art Nouveau : 浮世絵にみる東西文化交流―蘭学の受容からアール・ヌーヴォーへの影響まで、イメージとメディアをめぐる物語―」
(令和5年11月22日 於：ルーヴェン・カトリック大学)

②ディスカッサント「18～20世紀のメディアと絵画」 第1回 ルーヴェンカトリック大学・國學院大學 国際交流プログラム (令和5年12月19日 於：ルーヴェン大学)

③研究発表「Japanese culture and East-West cultural exchange in the 19th and 20th centuries : 19～20世紀の日本文化と東西文化交流」 第2回 ルーヴェン・カトリック大学・國學院大學 国際学術交流プログラム (令和5年12月19日 於：ルーヴェン大学)

6 今後の研究計画

現在は6月末締め切りの『國學院雑誌』（國學院大學）への寄稿に向けて、論文をまとめている。また、この度の研究成果に関わる出版物として、歴史関連の書籍、及び小学生向けの啓蒙書の2冊の書籍刊行を並行して進めている。小学生向けの浮世絵研究書に関しては、若き浮世絵研究者を育てる入門書として、海外の浮世絵コレクションの項目も設けている。今後も、国際浮世絵学会編『浮世絵芸術』などの学術雑誌への論文掲載、および書籍等の出版を介して、研究成果を発表するよう、論考をまとめている。

7 感想・所感

ヨーロッパ日本研究協会 (EAJS) 第17回国際会議の Workshop for Doctoral Students 2023 カンファレンスに令和5年8月14日～16日にかけて senior supervisor として参加 (ベルギー・ルーヴェン大学主催)、またルーヴェン大学で指導にも携わった2名の大学院生 (エマニュエル・モンテニー氏、ミリアム・シュクリ氏) が、令和6年4月から1年間本学に留学することとなり、私の研究室や大学院の演習にも訪れている。指導教員のヤン・シュミット氏とも定期的なやり取りを重ねており、研究はもちろん、ルーヴェン大学を拠点とした研究者間の関係性は、帰国後も一層深まっている。今後続く「人」のつながりを構築したという点においても、今回の国外研究の機会は、非常に有意義なものであったと考える。